

## シネマ日記



No. 58

○月×日 ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害を題材にした映画は今でも毎年のように作られている。

「犠牲者」としてのユダヤ人の物語だ。その点、「ミケランジェロの暗号」（独、ウオルフガング・ムルンベルガー監督）は、ユダヤ人の主人公がナチスを騙し、逆に手玉に取ってしまう痛快な趣向で、娯楽性を高めている。ウイーンに暮らすユダヤ人の画商は国宝級ともいえるミケランジェロの「素描」を隠し持っていた。

この裕福な画商一家にはドイツ人の使用人がいた。息子同士は兄弟同様に育った仲で、ユダヤ人迫害が始まった今も親友の間柄だ。ある日、画商の息子ヴィクト

ル、拷問を受けるハメになったルデイ。危険が迫る中で虚々実々の駆け引きは、ブラック・ユーモアの世界。はたして暗号は解読でき、本物を手にしたのはどちら…。サスペンス・タッチの展開が小気味よい。

○月×日 元イギリス首相の自叙伝を書くように依頼された「ゴーストライター」（ロマン・ポランスキー監督）が、元首相が滞在する米東海岸の孤島に赴く。前任のゴーストライターは草稿を残して、謎の死を遂げていた。元首相の話聞き、執筆を始めるが、その内容と草稿の違いに気づく。イギリスがイラク戦争でアメリカに加担した理由の裏に、恐ろしい国家の秘密が隠されていた…。その秘密を知った前任者は殺されたのではという疑いが、後を継いだゴーストライターに芽生えてくる。アメリカのCIAの影が自らにも迫ってくる。トニー・ブレアとわかるような元首相、彼のアメリカベったりへの批判も織り込まれている。一方で、幽霊のようにいつ消えてもおかしくないゴース

ルは使用人の息子ルデイに絵の隠し場所を教えてしまふのだが、ナチスに入隊していたルデイは、その絵がヒットラーの欲しがっていることを知る。ルデイはナチス内での出世のために、友を裏切り、絵を奪ってしまう。画商一家は強制収容所へ送られるのだった…。

ところが、その絵は贋作だったことがわかる。ルデイは、上司に「本物のありかを聞き出せ」と命じられるものの、画商は収容所で既に死亡していた。画商が遺した謎の言葉「視界から私を離すな」は何を意味するのか…。この「暗号」をめぐる、本物探しが始まる。

「ヴィクトルは当然、何か知っているはず」と拷問にかけるため、収容所から連れ出したものの、飛行機が墜落してしまふ。ナチスの上司の責任追及を恐れたルデイに、ヴィクトルは「服を交換して、成り代わってあげるよ」と申し出る。ナチスの軍服をまもって、ルデイになりすましたヴィクトル、逆に一時の責任逃れで収容所服を着たつもりが、本物のユダヤ人にさせら

トライターの孤独に、孤島の冬景色が一層の不安をかきたてずにはいられないサスペンスだ。

○月×日 2010年6月、日本が打ち上げた小惑星探査機「はやぶさ」（堤幸彦監督）の地球帰還は久々の明るいニュースだった。月以外の天体からサンプリングを採取して持ち帰ったのは、NASA（米国防空宇宙局）でも成し遂げられなかった快挙。そのプロジェクトを主導したJAXA（宇宙航空研究開発機構）チームの活躍をドラマ仕立てに映画化したもの。7年間の飛行中、電波が途絶えるなど数々の危機を乗り越えての奇跡の帰還のドラマを事実に基づき、感動を誘う。「あきらめないで」のメッセージが伝わってくる。

○月×日 新藤兼人監督が98歳で作った「一枚のハガキ」は自らの戦争体験を描いている。兵士たちは転戦先をくじ引きで決められ、生死を分かたず。その不条理への怒り、人間の命を軽んじられた庶民の無念さを、ときに滑稽に描いて痛烈に告発する。（内藤 哲）